

第5回世田谷区地域経済の持続可能な発展を目指す会議

日時：令和5年9月7日（木） 18時00分～20時00分

場所：世田谷産業プラザ3階 大小会議室

■ 出席者

〈委員〉

長山会長、中山(耕)副会長、古谷委員、栗山委員、千葉委員、城田委員、
竹内委員、見城委員、市川委員、大石委員、田中委員、中山(綾)委員、
吉田(亮)委員

〈世田谷区〉

後藤経済産業部長、納屋産業連携交流推進課長、高井商業課長、
荒井工業・ものづくり・雇用促進課長、黒岩都市農業課長、平原消費生活課長

1. 開会

【納屋産業連携交流推進課長】

定刻を回りましたので、まだ来ていらっしゃらない方がおりますが、来られると聞いております。かつ、今の時点で過半数を上回ってございますので、只今より、第5回世田谷区地域経済の持続可能な発展を目指す会議を開催させていただきたいと思っております。皆様本日はお忙しい中、ご参加いただきましてありがとうございます。

本会議でございますが、条例に基づき17人の委員により構成されております。本日は諸事情により、兒玉委員と吉田亮太委員は欠席となっておりますが、現時点におきましても全体の2分の1という事で、会議規則に基づきまして、会議を開催させていただきたいと思っております。

まず、配布資料でございますが、お配りしております次第の下部に記載してありまして、資料の1から資料の8と、参考の1と2という形でございます。不足がございましたら、事務局までお申し付けいただければと思います。また、本日の座席につきましては、前回同様、事務局にてクジにて配席させていただいておりますので、こちらもご了承いただければと思います。加えて、本日も前回と同様に、田中委員のご協力のもと、本会議の議論や委員からの提案の内容をイラストに落とし込むグラフィックレコーディングについて、株式会社cocoroéの渡辺様に会議に出席していただいております。渡辺さん、よろしくお願いいたします。

それでは、今後の議事につきましては、会長に進行をお願いしたいと思います。長山会長よろしくお願いいたします。

【長山会長】

みなさんこんばんは。本日第5回会議ということで、積極的な議論をいただければと思

います。よろしくお願いいたします。本日の議題ですが、次第にありますように、まず議題1に関しましては、前回までの議論を踏まえまして、事務局にて資料の修正、新たに、「取組の視点」と「答申案」につつましてまとめております。こちらについて議論をお願いいたします。次に議題2につつましては、委員からの提案ということで、何人かの委員の方から具体的な取り組みのアイデアなどについての提案がありました。その発表をお願いできればと思います。また、その議論もお願いできればと思います。

なお、本日の会議の流れとしましては、まず議題1について事務局から、議題2について委員の方々から説明をしていただきまして、その後、全体まとめて意見交換の時間を設けております。これらについて議論を深めていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

それではさっそく議題1に入りたいと思います。本日は資料の3、6、7を中心に行います。事務局より説明をお願いいたします。

2. 議題

1 地域経済の持続可能な発展を推進していくための基本的な考え方について

【納屋産業連携交流推進課長】

まず資料3をご覧くださいませでしょうか。ホチキス止めのA3の資料になってございます。こちらは前回配布したものの更新版という形でございまして、白黒なので見づらいのですが、薄くなっているところや下線が引いてあるところがございまして、まず、一番上の帯のところですが、背景、課題、目指す姿（インパクト）というのがございまして、三列目に、前回のものは取り消し線で書いておりますが、方向性とか視点とかも戦略という書き方をししてございまして、前回のご意見を踏まえまして、目指す姿の実現に向けた対応の方向性という形で整理をし直したところがございます。その次が、取組、提供方法とございまして、さらには具体的な実施方法例としております。その上で一番右列に一行追加をしてございませが、こういう具体的取組みを実施した結果として、何がどう目指す姿に寄与するのか、裏返して言えば、なぜ実施するのかということを行追加してございませ。目指す姿よりも一つ低いレベルというか、下のレベルのところ記載をしたつもりで書いてございませ。

例えば、一番上のところで申し上げますと、目指す姿として、地域の事業者が安心して継続的に事業を営むことができる世田谷という目指す姿があったときに、目指す姿の実現に向けた方向性としては、例えば一つにはセーフティネットの充実があるんじゃないかということで記載をしてございませ、それは、融資あっせん制度の拡充であったり、経営相談窓口の拡充という方法があり、さらにそれをブレイクダウンすると利子補給率の話であったり、限度額の話、そういったところが取り組みの具体的なところの可能性としてあるんじゃないかということがあって、それをなぜそれをそういうことを実施するのかということ、継続的な事業経営に向けた環境の整備という観点であって、これが結果として目指す姿で掲げた、地域の事業者が安心して継続的に事業を営むことができるというところに回ってくる。そういうイメージで一番右列を追加してございませ。

資料3については、前回会議で概ねご説明させていただいておりますので、細かく全てを見て行くという形ではなくて、主な変更点をご説明させて頂く形としたいと思います。1ページ目の下の方に、「目指す姿の実現に向けた対応の方向性」の下から4つ目のマスに、「影響を最小限に抑えた円滑な廃業に向けての支援」とございますが、前回、ここは言葉の使い方についてご指摘いただいております、あくまで廃業せざるを得ない場合に、円滑な廃業の手続きを支援するという形で、廃業を促進するという事ではないということで修正をさせていただきます。

2ページ目に移っていただきまして、中段のところですね、「目指す姿」のところ、「新たな価値をもたらす多様な専門人材を活用した事業者支援体制の充実」という形で、これも修正をさせていただきます。3ページ目の基本的方針については、目指す姿の一番下のところですけども、「起業家精神あふれる世田谷区」というのが前回違和感があるということで、ご意見いただいております、「アントレプレナーシップが発揮される世田谷区」という形で一度置かせていただきました。このアントレプレナーシップは、起業・創業というだけではなくて、広義に捉えて意欲的な取組であったり、前向きな考え方みたいなところも含む大きな意味でのアントレプレナーシップが発揮されるまちを目指して行くということで修正案を書かせていただきましたが、ここについても議論をいただければと思っております。

5ページ目に移っていただきまして、基本的方針4の部分ですけれども、中段より下のところに、前回エシカルと脱炭素っていうのは、別の枠組みにしてあったのですが、エシカルというのは非常に広義の概念であって、脱炭素のようなことも包含するというご指摘ございましたので、枠を統合した上で、消費者の話、製造者の話、さらには脱炭素のようなところを組み替える形としております。この資料につきましては、主な修正点ということで、以上のご説明とさせて頂きたいと思っております。

次に、資料4をご覧いただけますでしょうか。カラー刷りのものでございます。こちらに関しましても、細かな修正を一部させていただいたところがあるのですが、例えば、先程の資料3と連動しますけれども、真ん中の柱のところの一番右のですね、前回5つの柱に脱炭素が独立するという形でありましたが、先ほど申し上げたとおり、エシカルというところに包含をしたので、4つという目指す姿で修正をさせていただきます。下の全体像メインテーマみたいなところは、前回から修正は今の所してございませんでして、わくわく感、そういったところが持続性を生んで、そうすると、持続的な活動に様々なステークホルダーが集まってきた競争が生まれる、それによって新たな価値が創造され、そういう新たな価値が想像されるところには当然わくわく感みたいなところがまた発生し、これがグルグルと循環をしていくことで、新たな価値であったり、豊かさを感じる、そういったところに繋がっていくんじゃないかという、これも前回、議論がありましたけれども、こういう取組の根底に流れるというか、設定するというかですね、そういうイメージで記載をさせていただきます。そういった形で資料4の説明とさせていただければと思います。

次の資料5をご覧いただけますでしょうか。こちらに関しましても、参考資料に近い位置付けでございますが、これまでの議論のまとめという形で、毎回お配りしております議事録から箇条書きの形で抜粋をしております。特に一番上の帯のところの系統というところで、

項目ごとにまとめてございますので、ほとんど議事録と同意でございますので、こちらに関しては後ほどご覧いただければと思っております。

次の資料6というオレンジの資料でございますが、こちらを少しお時間をいただいてご説明させていただきたいと思っております。取組の視点と言う形で記載をしておりますが、上から経緯・背景というところがございますけれども、一つ目のところ、現産業ビジョンについては2018年からのものですが、産業振興の観点からは、様々な取組や施策を広く網羅しているというふうなご意見を、これまでの会議でもいただいてまいりました。また、2022年4月の地域経済の持続可能な発展条例においては、社会経済環境の変化等を踏まえた考え方や、経済産業政策の軸を大胆に変更追加ということで、基本的方針を4つに増やすとともに、産業の振興のみならず、社会課題の解決とも両立させた地域経済の持続可能なというふうな考え方にシフトをしてきたというのがこれまでのところでございます。矢印の下のところですが、そのうえで基本的な方針の実現に向けて、政策的な必要性の観点から、目指す姿とその実現に向けた方向性や取組例などを広く網羅的に整理してきたのが、これまでの議論だと思っております。先ほどの資料3というA3資料を整理してきたかたちで、これまで議論が進んできたのかなと思っております。

一方で前回もご意見いただきましたが、全ての取組を網羅的に実施することは困難性が高いため、非常に多くの取組が出ておりますので、必要性であったり、波及効果等の観点から、優先順位やメリハリをつけて取組を進めていくことが必要かと考えております。その際、施策の必要性や効果などの観点に加えて、各種取組から共通する課題や不足を抽出して、取組の際の視点として、考えてみたというペーパーでございまして、その視点に基づいて対応の取組の中から、優先順位やメリハリをつけて実施し、取組の効率化であったり、効果の最大化を図り、ひいては目指す姿の実現に取り組んでいくという、そういうことが必要ではないかと考えてございます。

オレンジが3つございますが、一番上のところのオレンジ部分ですが、これまでの議論やこれまで多くの取り組みが挙げられてきた中から、主な課題をいくつか例示をさせていただきました。一番左の3列あるうちの左の列ですが、施策の波及の効果の波及であったり、対象の広がり、そういったところが限定されてるんじゃないかということであったり、公益性や公共性、公平性等の観点から、適切なのかという課題もあるかと思っております。

また、政策の使い勝手や認知度に関しては、非常に多くの意見をこれまでもいただいてまいりました。ニーズの多様化専門化への対応や実務に即した対応ということで、ニーズが多様化している中で、真に必要な求められる取り組みが提供できているのかということは、一つ大きな課題かと思っております。また、一番下の下から2つ目の所ですが、地域資源や地域内外の人的資源の有効な活用ということで、92万人の人口がいる中で、非常に高いスキルや意識を持った方々も多い中で、そういった方々と上手く連携できているかということ、そこは非常に課題があるということかと、これまでの議論を踏まえて思っております。真ん中の列も少しご紹介させていただきますと、相談する場所や人の認知度、またどこに相談していいかわからないということであったり、連携やネットワークに関してはこれまでも非常にそういったところが必要だという形でご意見をいただいてきたところかと思っております。

更には、公共的役割を担う団体や人の役割等の認知や活用度ということで、商店街をもう少し活用して欲しいというご意見もございましたし、またその下、情報やデータの不足、またはたどり着かないということで、ビッグデータの提供、そういったご意見もいただいております、非常にそういったところが不足している面があるんじゃないかと思っております。

一番下のところで、中間支援組織のことを書いてございますが、そういった組織の活動の十分な相互連携でありましたり、それによる多様な選択肢の円滑な提供というところは、各団体の活動が相互連携を促すことで解決する取り組みが非常に多いと考えられる中で、そこに至っていない部分が強んじゃないかということでありましたり、3列目に移っていただきますと、制度や取り組み、活動への柔軟性ということで、ゆるさも書いてございますが、制度がカチカチになっているがゆえに、非常に枠を狭めてしまっている面があるんじゃないかと、ゆるいつながり、ゆるさみたいなのが、時代の求め的にも必要な部分もあるんじゃないか、というところを考えてございます。他にも、あの多岐にわたると思っておりますが、こういったところを取り組み、政策なんかを見ながら抽出させていただきました。

更に、それを大きく括っていった時に、真ん中の列なんですけども、横断的課題として1から5までをまとめたというのが、中段のオレンジ部分でございます。まず1つ目のところが、他の政策との横断的な連携が十分でないということで、産業政策を産業政策として縦に捉えるのではなくて、分野に横断的に関わるような横軸としての地域経済政策としての取り組みが必要じゃないかということが、会議の最初の方でもございました。そういったところの観点が一つ大きな横断的課題としてあるのかなと思っております。横断的課題の2というところですけども、これは必要性や影響、波及効果が最大化されていないということで、ニーズに沿ったものになっているのかであったり、真に必要性や影響があるものなのかという点は、よく精査をする必要があるということで考えてございます。3の部分を使い勝手が悪いということは、従前から色んなところで言われている課題かなと思っております。横断的課題の4につきましては、専門機関/人材を活用できていない、多様な主体を巻き込めていないということで、先程ありましたが、92万人の人口がある中で、そういったところを巻き込み連携が促進されると、さらに非常に良い流れというか、良い取組になるんだろうと思っております。横断的課題の5というところは、協業や連携を促す環境が十分でないとか、ネットワークの構築や連携の話、毎回これも非常に議論になっておりますが、そこは周知含めて大きな課題だと思っております。こういう横断的課題をこう裏返していくようなイメージで、一番下に視点を5つ、案として記載しております。

まず、視点の1というのが、横串としての地域経済産業政策という視点を持って、今後取り組みを進める必要があるんじゃないかということで、作文を色々書いてるんですけども、矢印の下のところですが、こういう視点を持って取り組みを進めることで、分野横断的な効果が更に広く波及したり、新しい出会いとか、そういったところで付加価値が作られたり、大きくなったり増大したりというところにつながっていくんじゃないかということで、そういう視点を持って、今後の経済産業政策の検討や実施が必要ではないかということで、視点をそこに置くべきということで、視点1として掲げていると、そういうことでございます。

視点の2がインパクト設計ということで、公共的必要性なんかももちろんなんですけども、

地域経済にどのような正の影響があるかということで、そういったところを考慮した制度設計が必要だろうと考えておりますし、その評価の手法についても、インパクトの観点から設定し、評価して行く必要があるかと思っております。このインパクト設計の考え方を取り入れることによりまして、地域経済とか産業分野への効果が最大化されるということであつたり、真に区民生活の質の向上に寄与する部分に必要な取り組みがなされていくことに繋がるのではないかというふうに考えております。

視点3がデザイン思考ということで、ユーザー視点、実態把握しておりますけれども、使える施策によって真に必要な人が使える状況を作っていく、構築して行く必要がある。視点4が民間活力の活用と役割分担ということで、専門機関であつたり、専門人材を巻き込んでいくということが、今後必要と思っておりますし、それによって多様なニーズへの対応ができるであつたり、実務に即した深い相談ができるであつたり、そういったところにつながっていくと思っておりますし、こういった視点を持つことで、民間活動と行政の活動の役割分担も明確になる部分があるかと思っております。そうすると行政は公的必要性の高いものに注力し、民間の肩の力を借りる部分を借りるというような、そういう視点を更に強めてやっていくことで、より効率的効果的な取組に繋がっていくんじゃないかということで考えてございます。

最後に視点5というところで、プラットフォームを通じた多様な主体の交流と言うことで、連携やネットワークの構築については多様な意見をいただいてまいりましたが、今後は、個々に支援を考えていくということもなんですけれども、プラットフォームを整えるというところで、各企業であつたり、区民の方が自分の目指す活動に自ら取り組める環境整備をやっていくことで、より一層、その人のニーズに応じた効果が適切に創出されるのではないかということで、プラットフォームの環境整備、または、そういう個々の支援というよりは、広い方々に対する波及が生まれる観点からの取り組みの検討をして行く必要があるんじゃないかと考えてございます。

以上、取り組みの視点ということでございまして、先程の資料3でご提示しました網羅的に書いている取組が考えられる中で、こういう視点を持って優先順位であつたり、メリハリをつけて取り組んでいくことが必要じゃないかという流れの中で、取組の視点について考えたと言うことで、説明をさせていただいたところでございます。

最後に資料7というのがその次についてございます。こちらをご覧くださいませでしょうか。答申の骨子・素案の案という形で書いているんですけども、ページを開いていただき、目次を見ていただければと思います。まず1が本答申についてということで、位置付けや諮問の内容、2が「地域経済や産業の現状と課題」、3が「経済産業政策の方向性」、4が「その他」ということで構成してございます。もう少しだけ中身をご紹介させていただきたいと思っておりますので、2ページ目をご覧くださいませ。2ページ目の(1)が、先程申し上げました本答申の位置付けであつたり、諮問内容ということでございまして、位置付けについてはその条例に基づくものであるとか、条例に基づく会議体での答申であるというような、そういったところが書かれてございます。(2)の諮問内容はご存知のとおり、地域経済の持続可能な発展に向けた基本的な考え方ということでございまして、その下ですね、

2ポツのところで、地域経済や産業の現状と課題という形でございます。

まず、(1)が現状でございますが、ここについてはまだ箇条書きで、斜めに書いてございますけれども、まだ並べただけという形でございますので、次回会議までには文章のような形で整理をしたいと思っておりますけれども、地域経済循環の状況でありましたり、事業所数、従業者数、付加価値とかですね、第1回会議でお示したような各種統計データなんかの客観的な数値などを改めて整理をして掲載をして行くことを想定してございます。本日はこの中身についてというよりは、こういう枠組みで今考えているということのご紹介ということでご理解いただければと思います。3ページ目の(2)のところが、これも同様に課題ですけれども、(1)のデータの裏返しになる部分でございますけれども、特に課題として認識する部分を今後整理して行きたいと思っております。4ページ目に移っていただきまして、3の方向性のところでございます。ここも現時点では箇条書きなんですけど、最終的には文章のような形にして行きますけれども、簡単にご紹介をさせていただきますと、1つ目のマルのところで、条例で非経済的な価値との両立が重要だということで、いま条例上そうなっているということがあって、2つ目の所で、その上で時期は前後しますが、産業ビジョンで産業振興の観点を主とする具体的な取組等を整理し、この間、それに基づく産業振興政策を実施してきましたと言うことになります。それで条例で掲げた理念や方向性を実現するべく、産業振興の観点では、現ビジョンをベースとしながら、条例に合わせた体系的な整理に加えて、特にコロナを契機とする社会経済環境の変化により、複雑化かつ多様化した課題に対応するための考え方や、具体的な取組を整理して実行に移して行くことが必要と。そのような考えのもとに、条例で掲げる理念の実現を目指して、4つの基本的方針の実現を構成する要素を目指す姿として整理をしたというふうにしています。

その上で具体的な取り組みについてもまとめてきたということで、これまでの経緯を書いているところでございます。3ポツの最後のマルのところですけども、この提案を世田谷区は真摯に受け止め、大局的な視点に立った地域経済の持続可能な発展を図っていくためのビジョン、ここでは(仮称)世田谷区地域経済発展ビジョンと書いてございますけれども、考え方を整理策定した上で、具体的な取り組みを実効性あるものとするプランを検討するよう提言するものであるということで、あくまで答申でございまして、答申を受けて行政側でビジョンを作成することを想定しておりますけれども、ここではこのように記載をしているところでございます。

次に、(1)で横断的に共通する考え方ということでございますけれども、これは先程の資料4カラー刷りのものでご説明したものをワードの形に落とし込んでいったようなものでございますので、詳細の説明は省略させていただきたいと思っておりますが、先程グルグルと循環してわくわくが持続性を、そして共生を新たな価値をとというような形で、ご説明申し上げましたようなことを改めて文字で書いているということでございます。前回、先程もですけども、全体の取り組みの根底に流れるキーワードのようなものだというようなことで申し上げておりますけれども、そういう位置付けで記載をしたということでございます。

(2)に目指すべき方向性と言う形で、これもまだ箇条書きでございまして、これは先ほどの資料5で議事録をピックアップしたものと説明させていただきましたけれども、それを

またペタッと貼ったような形でございます。これを次回までには作文のような形で綺麗にまとめる作業をさせていただきたいと思っておりますので、現時点ではあくまで枠組み、項目という形でご覧いただく程度で留めておいていただければと思います。少し先に行きますが、9ページ目のところをご覧頂ければと思います。

(3)「基本の方針」と「目指す姿」および「実現のための方向性」という形で、ここからは、資料3の先程のエクセル、A3資料を落とし込んでいったもので、基本的には同じものでございますので、ここも枠組みを見ていただくというところをお願いできればと思います。その上で15ページ目まで飛んでいただきますと、今度は(4)の「取組の視点」というのがございまして、これが先程、資料6という形で少しお時間をいただいてご説明させていただいたものを、ワードに落とし込んでいったようなものでございまして、説明内容としては、先程申し上げたところと変わらないものでございます。こういったのが16～17ページと続いていく流れでございます。これが最後、色んな付録が付く想定をしておりますけれども、答申の全体像ということですが、産業の現状と課題というところを、第1回会議を中心に議論したというところがあって、第2回から本日まで議論してきたようなどういったところを目指すべきかっていうことであったり、その下で意識すべきようなものは何かであったり、具体的にどんな取り組みが必要か、更にどういった視点で優先順位であったり、メリハリをつけてやっていくかというようなところを、この3のところにギュッとまとめたような形で構成をしております。資料の説明は長くなりまして申し訳ありませんが、以上でございまして、本日はこの修正しました資料3でございまして、資料6のオレンジの視点の資料であったり、そういった時にこんな課題が入ってないとか、こういった視点が不足しているとか、そういった観点から、あとは答申の目次や枠組み、そういったところに関しても、ご議論ご意見をいただければありがたいと思っております。長くなりましたが、以上でございます。

2 委員からの提案

【長山会長】

ありがとうございます。それでは、引き続き議題2の委員からの提案に入ってまいります。この間、委員の皆様から大きな考え方に関するものを、具体的なアイデアについて意見を出していただきましたが、委員の方から具体的な取り組みについて発表があるということで、全体として30分程度予定しております。資料は参考2と書いてあるものですね。A4の横で3枚のものです。それでは、参考2で委員会からの施策提案について、私の方から最初にお話ししたいと思います。

表紙にありますように、まず、この施策の提案にあたりましては、勉強会におけるその議論の積み重ねを経まして、条例の理念を腹落ちして、その上で理念を具現化する施策や事業について、アイデアを創発的に出していったというものです。これまでの会議においても色々な意見がありましたが、そういった中から資料3の方で具体的な実施方法の例が体系図の方にかなり列挙されているわけですが、そういったものに横串を指すようなものとして考えていったということです。

特に、基本方針の1から4にそれぞれ軸足を置いて考えたわけですが、その1から4の縦ではなく、波及効果と先ほどの視点があつたような横串を指すような視点で提案すると努めております。その横串としましては、区民や事業者のウェルビーイングやサステナビリティというものが、やはりその最上位の目標ではないかというふうに、我々としては考えていると言うところです。施策提案のポイントとしましては、多様な人や物や事業が、多様なテーマ課題の下で、共感や信頼を基につながったり、つながって創発し共創し価値を創造する仕組みづくり、プラットフォーム作りということになるだろうと。一つの手法として言うならば、コレクティブインパクトのようなものだという事です。今回の委員提案の施策というのは、改正される産業ビジョン、仮称・地域経済発展ビジョンの中に入るアクションプランのモデル事業の一つとして取り組んでいってもらえればということをご想定しておりますし、また、先程の答申案の中における基本方針の1から4の中に盛り込んでいってもらえたらよろしいのではないかと考えております。

また、今回は一部の委員から出てきておりますが、まだ時間がありますので、他にも様々な委員の方々から事業というものを考えていければと思っておりますし、次年度以後もこの発展会議があるので、この発展会議におきましては、こうした委員提案というものが、継続的に構想していけるような、そういった会議のあり方として一つの姿勢を示すものを、つまり事務局の方で考えたものを我々が了解するというだけではなくて、具体的に提案をしていくというような、構想するような会議体ということを目指しているということで、一つ事例になったのではないかと考えております。

それでは、一枚めくっていただきまして、基本方針1に関するところからになります。この後、1、2、3、4それぞれの軸に基づいての具体的な計画なり、取り組みについての例示としていきます。まず基本方針の1に関しましては、これは区民の生活を支える多様な地域産業の持続性を確保する、そういった産業基盤の強化というのが基本方針の1でございますが、これに関しては、現行の産業ビジョンというものをまず踏まえるということになっていて、この会議の中でもそのまま踏襲しましょうということになっています。ですから、それはもう議論として済んだ話として、その上で新たに今回ビジョンを作るとするならば、というところでの観点で、新たな部分に関してのところを中心に書きました。その場合、新たなといった時に誰がやるんだっていうその主体というところにおいては、まず、この新たなビジョンというのを、区民や事業者の方々に届いて知ってもらうということももちろんあるわけですが、何よりも行政、つまりその区の職員の方々に、まず腹落ちしてもらって、区の方々が考える施策立案の中に取り込んでいってもらいたいというところが一つあります。そういったような点で答申というものがあつたわけですが、そういう中で、その区の産業部門の体制や機能についても、ここでは言及しているということになっています。

まず、もともと三層体制になっていて、経済産業部というのがある、その下に総合支所があつて、その下にまちづくりセンターがあるというような、三層構造になっているわけですが、実は上も下もなく、むしろボトムアップで持ってきた方がよいと思っておりますが、そういうものになっています。役割としましては、経済産業部の方では、今回やっているような産業振興の基本方針を作るといふこともありますが、何よりも足りてないのは、やは

りその自治体のDX、デジタル化の部分であって、これは基本計画の中でも出ていたわけですが、それを産業振興の部門を通じて、ここは民間の企業等と競争ができるわけですから、共に造るということです。DXを推進し、実装して行くところを区としては期待されているだろうと思いますし、やるべきというふうに考えております。それをやりますと、先程の色々なつながりっていうことも、やり易くなってくると考えています。

つながりに関しては、先ほど横串を刺したり、地域産業政策が横串を刺す多様な部門というところに領域を踏み込んでいきます。具体的に言うと、教育。教育委員会もありますし、子どもの部分を「うめとぴあ」とかありますが、環境部門、また都市整備等と、それぞれ部が分かれてやっているわけですが、この産業振興ということに関して言うならば、その分野が今回の条例によってより範囲が広がったわけですから、当然ながらその領域まで踏み込んでいくということが求められるということです。また、世田谷区産業振興公社に関しては、これまでのように、そもそも産業振興というところで、もともとの産業ビジョンに関するものという所ならば良いのですが、新たに広がってきていますので、事業の再構築っていうのは当然あるだろうということです。また、セタカラーのような新規の事業というものをどんどん作っていったり、効果測定っていうこともやるのが経済産業部門だということです。

では、総合支所というのは5つあるわけですが、5つの総合支所においても、ここでこそ産業振興の計画を策定する機能っていうのを付けるべきです。これはかなり難しいところなんですけど、区としてのリソースを配分するっていうようなことを考えていただければなと思ってます。そして、何よりもこの絵の中にありますが、世田谷の旧池尻中の跡地の所にある、この間、間中さんや小野さんが話してくれた、正にわくわく感のある世田谷ヴィレッジの話がありましたけれども、ああいった世田谷ヴィレッジというのは、池尻のような所だけを拠点とするだけではなくて、やはりそれぞれの総合支所単位の5つの所でやっていく。つまり、世田谷区は92万人もいて巨大な自治体である訳であって、5つに割ったとしても、それぞれの地方におきましては、地方自治体のレベルの単位です。ですから、5つの所で本来それぞれの産業振興計画を作るぐらいの機能が必要だし、この世田谷ヴィレッジのような拠点というもの、つまり、産業振興や創業、学び、コミュニティ、まちづくり総合拠点というのが、間中さん達が考えている世田谷ヴィレッジだと思いますが、そういったものを作っていくということが大事で、面的にあれを広げていくと、池尻の所だけで使うって事にとどまらないということがかなり大事じゃないかと。面的に広がらせるってことが大事で、面的な広がりっていうのは、先程のようなプラットフォームということ意識してるということになります。

さらに言うと、まちづくりセンターの所でも1万から2万人ぐらいの単位でやって、ここでも住民との接点というのが一番ある所であって、住民と事業者や企業っていうのは当然ながらこれまでは相反して対立してたわけですが、これからはニーズっていうものを事業のアイデアに持ってくる場、この後出てくるサステナブルワークスタイル共創プラットフォーム作りっていう提案が出てきますが、そういう様な場というのは、実はまちづくりセンターのような、1万人から2万人ぐらいの、いわゆるコミュニティ経済レベルのところの一つ一つ置いていく、例えば、子育て広場の様なものがありますが、ああいった所で、ワークス

ペースなんかがあって多様な機能というのがそこで出てきていますが、そういった様なものが出てきたらいいのではないかとこのところでは。

一番のところはそういうことで、右にあるようなところっていうのは、あくまでも国や都道府県と違って、世田谷区として何をするんだと。国や都道府県というのは、今は中堅企業とか、スタートアップといったようなところで、中小企業の政策で言うなら、上昇部門のところをかなり意識しているんですね。どちらかというと、その2010年に出てきた中小企業憲章や小規模企業の基本方針っていうのがあって、その小規模企業に対するその地域経済の存在意義とか、そういったものがこの時代は意識されていて、中小企業の振興条例の制定運動なんていうのも自治体単位であったわけですが、その運動が今は封印されてしまっていて、そういったあの上振れするような生産性向上運動みたいなどころになってきているので、改めてその小規模企業やその小規模事業者の役割って何なんだってことを考えた時に、それをやるのはもう国や東京都のようなところではなく、基礎的自治体の世田谷区の様な市区町村になるわけです。ですので、市区町村がやるべき産業政策としては、それはやはり、住民を、生活くらしという所を意識した小規模事業の政策であって、その際には、小規模事業のいわゆる廃業問題とか、事業承継というだけではなくて、人材の育成作りというところで、フリーランスも含めたアントレプレナーシップっていうところが大事ではないかということでの、そういった場づくりということを提案するということになります。

それではですね、次に3ページについて、こちらは吉田委員から、お願いします。

【吉田（亮）委員】

三茶ワークの吉田です。

私がこちらの資料を作成した背景として、改めて今回のこの発展条例の資料を先ほど納屋さんがお話された話を伺ったり、これまで参加する中で感じていることとしては、世田谷区の特徴として、エシカル商品の推進を図るとか、ソーシャルビジネスの推進を図るとか、経済発展ならびに社会課題解決の両立を図ると言った、普通の経済産業ビジョンでは出てきにくいキーワードが出ているということが、やはり世田谷の一番の特徴だと思っています。

先ほど長山先生もおっしゃったように、そこには90万人もの暮らす人たちが実際にいて、その中でどういう経済の発展が望ましいのかって考えている時に、こういったキーワードが出てきてるんだらうなあと改めて話を聞いていて思っていたことです。その時に、この取り組みの視点で、横断的課題の中で世田谷の人材を活用できていないとか、共有連携を促す環境が充分でないというのは、まさにその通りだなというふうに思っています。

ただ、ここにもう一つ、市民が持っている資産。事業者でもなく、普通に暮らしている人たちが持っている資産だったり、その人たちが持っている意識の高さみたいなのも十分に活用できていないっていうのは、横断的な課題に含まれているのではないかと思います。そういう普通に暮らしている人たちのその能力をもっと世田谷の産業振興に活かすことができるのであれば、世田谷の地域経済が発展していくし、区民生活の向上というところも持続的に繋がっていくのではないかとこのところでは、私の中で今回発展会議に出て感じていることです。

その一つのHowというか、ソリューションとして、「世田谷における地域密着型投資ファ

ンドの重要性」という資料に繋がります。

要は、市民が直接、世田谷の挑戦しようとしている事業者に投資できる環境を整備するというのが、世田谷 90 万人の資産だったり、住んでる人たちのアセットを活用して、世田谷の事業者の成長を加速させるっていうことに繋ぐ一つの How としてこういったものがあるのではないかというふうに考えて提示をしております。

今のところ、非上場株式型のクラウドファンディングや、不動産型のクラウドファンディング、社債型のものや、NT を使ったものが、ふるさと納税を使って、ほかの自治体とクラウドファンディングをしたりと、その資金を集める手段は世の中に広まっている中で、こういったものがもしかしたら視点 5 のプラットフォームというところの一つのプラットフォームになるのかもしれない。

市民の人たちが自由に投資ができるプラットフォーム、世田谷の事業者に対して投資ができるプラットフォームというものがあれば、より全体の底上げが図られると考えています。

2 つ目に関して、これは四角で囲んでいる、2 つ目の市民事業者同士が繋がる仕掛け作りと書いてあるところに関して、世田谷の特徴としては、住んでいる人がいて、世田谷で活動して事業者がいて、その人たちの関係性だったり、つながりがもっと繋がり密度が高まることできたら、①の要は直接この人に投資しようと呼援しようっていう状態が作れるんじゃないかなと言う風に思っています。

なので、例えば、私たちが SETACOLOR のピッチイベントをやっていますが、閉じた、事業者だけが集まる環境でやっているところを、商業空間でやって、子供たちが買い物に来たら出会えるようになって、「こんな大人たちいるんだ、自分もなりたい」というような、そういう繋がりがあったり、お父さんは「この事業者がいるんだったら世田谷のためになるから投資しよう」といった、そういうふうな環境づくりが考えられます。

あとは、世田谷でやっているネイバースクールと SETACOLOR で、専門家の方が、自分の高校生の子供を連れてきてくれたのですが、その子供がその環境に来たら刺激を受けて、今度のプレゼンテーションイベント自分もまた来たいと言ってくれた。そのように、世田谷で住んで、事業に挑戦する人たちが住んでいる、傍にいるっていうところを、より交流を促すような、ここで言うところの多様な主体の交流ってことなのかもしれないが、そういうものを作っていけると、より市民のパワーを活用して、世田谷の地域経済を発展させていくっていうことが、加速できるんじゃないかという風に考えて、このページを作成いたしました。私からは以上です。

【長山会長】

はい、ありがとうございました。基本方針 2 の柱にそって書かれた委員提案ということになります。次は基本方針 3 について、市川にお願いいたします。

【市川委員】

私からは 4 ページ目と 5 ページ目と二つあるんですが、まず最初に、基本的な考え方というのは、左に書いてある紹介です。これは共創のプラットフォームを生み出す時に、どうい

ったプロセスの場があればいいかというものをイメージしたものです。

左から右に流れていくような感じになっています。行政や企業やアカデミック、NPO、市民がクロスセクター、マルチステイクホルダーによるエコシステムのようなものを作る時に、こういうものがいいのではないかという話です。

一番左が、共創したり協働するときに、どういったまちの声吸い上げるかということが重要だと思っていて、なるべく日常的な語りであったり、意図的ではない会話の中から、今このまちでどんなことが起きているのか、起きようとしているのかということをしゅく上げる様な場があることが、まず最初かなと思いました。

【Me から I】、生活者・当事者のナラティブと書きましたけれども、自分だけが感じているかもしれないことが、日常の延長にある場で安心して口に出せる場があることで、言語化できない感覚が言葉になったりとか、いろんな人の価値観に触れたりとか、共感とか理解を生んで、「これはもっとみんなで考えるべきことだね」というように、徐々にまちの声がひとりのものではなく、私たちのものになって行くみたいなのをイメージしました。それが1つ目の円から2つ目の円への移行です。

真ん中は、【I から We】と書きましたが、いろんな場所でいろんな語りから作り上げられたものが用いられて、1個目の円のときには解決しようとしなくて、とにかくそのままにしゅく上げるということをしてるのですが、この真ん中の円になって、課題の構造への意識と書きましたが、こういった声や意見は、どういう構造で起きているのかとか、何があってこういう風になってるのかというように、ここで集まったみんなが、それぞれの経験やそれぞれの実践を踏まえながらも、お互いの感覚をもちよったりして、対話をしたり、文脈を作っていたり、複雑な問題であったり複合的な問題だと思うんですけども、これについてはこういう切り口でこういった方法論が取れるのではないかということで、課題を抽出して何かアイデアをみんな考えてみる。そして学習して、次の新たな発想を得ていくということが真ん中の円です。

そこできつと、問いに対して問題を解決するなり、そもそも問題じゃなくすというような、実践というのが最後の右側の【We】と書いたところです。ここでは、二番目のみんなでふんわりと持ち寄せられたものの中から、構造的にここにアプローチするのが良いのではないかとというのが生み出せたらいい。企業であれば、その自社のサービスにプロダクトの価値提供があるかもしれませぬし、行政では政策が形成されたり、何かここでアカデミックの学術的な発見があったり、市民の行動変容が起きたり、活動がより浸透していたり、その社会価値が可視化されて、なるべく日々の皆さんの、区民・生活者の中の声がまちのこととして解消を解決されていくというようなプラットフォームをイメージしました。

一番下に、『様々な「兆し」に触れる場づくり』『多様性を前提とした信頼関係の構築』というものが前半の部分で、そこから集まった声をもとに、パブリックベネフィットであったり、コミュニティベネフィットというものは、私たちが向き合うべき問いは何か、こういった方法論がありえるのかというのを探求し、実際に行動して行くというのがこのイメージです。

次にもう1枚が、イメージは1枚目のプラットフォームの中で、多様な働き方をみんな

実現するっていうことが必要だとテーマがアップされて、ワーキングが実践していくというイメージで捉えてもらえばいいかと思います。あえて「サステナブルワークスタイル共創プラットフォーム」というように、仮称をつけさせていただきました。特にキャリアが途切れない多様な就労機会であったり、多様化した社会的役割のあるまち、経済的なお金を稼ぐだけじゃない役割も含めて、さまざまな形でひとりひとりのキャリアが途切れずに続いていく、転換されていくまちというものを、地域経済とか地域産業の持続的発展と掛け合わせて、何か推進していけないかということで考えたのが、このプラットフォームです。

左側が、どちらかというと事業者としてのプレイヤーです。足りてないところがあると思いますがご容赦ください。事業者のイメージです。右側が、地域人材のイメージです。それぞれが、この産業ビジョンの賛同などを元に、このプラットフォームに参加をするというのが大前提ですけれども、皆さんの課題意識や、ここに新しい機会があるんじゃないかとか、自社や自分のリソースを持ち寄って、みんなでここで共有・資本化してって、原資を集めてくるっていうのが基本的な考え方です。

このプラットフォームに参加することで、政策への理解や、あと一枚目のプロセスで集められた、このまちでどんなことが起きているのか、どんな人たちがいて、どんなことを思っているのかということに触れることで、サステナビリティの理解であったり、行政への理解も進んでいくと思います。また、学ぶという姿勢も含めて、プラットフォームを作ったらいいのではないかも考えました。企業は大企業と地域の企業とを分けるか悩みましたが、企業にとっては企業文化がここで交わることで、新しい発見があったり、越境の体験につながったり、地域の外部人材を活用するということで、サステナビリティ経営やダイバーシティ経営が促進されたり、生活者・市民との協働というものが進むということが、このプラットフォームに参加する意義のようなものかと思っております。

また、スタートアップもこういったプラットフォームがあることで、世田谷の企業が地域における信頼構築につながったり、必要な資源とつながったり、地域の外部人材スタートアップが雇用するまでもなく、スピード感をもって動いたりしていますので、そういうところに世田谷の人材が関わるということは、きっととてもいいメリットだと思います。ここで生活者と近いところで、自分たちのサービスを磨いていこうというようなことがスタートアップとしても魅力になるのではないかと考えています。

また、NPO や社会的企業においても、ここで幅広いさまざまなリソース・資源とつながったり、地域の人材が参加してくれることで、地域と一緒に組織運営し、自分たちの活動への参加や協力っていうのを得られると思います。さらに、そういったものが仕組み化されると、資源が集まりにくいNPO やソーシャルな人たちも、資金だけではないさまざまな経理ソースの調達ができるのではないかと思います。同じテーマで集まることで、それぞれの小さな活動のユニットベースは残しながらも世田谷のコレクティブなインパクトを示せるようになると、学術的な発見にも繋がると思いますし、税金がきちんと活用されることを理解する上でもいいのではないかと考えております。コレクティブインパクトっていうものも意識して、このプラットフォームを置くといいのかなと考えております。

右側の地域人材側は、地域をフィールドに単純に働き口を得るのではなくて、地域をフィ

ールドにして、自分のライフキャリアの開発というのを地域をフィールドにやることと循環型経済への参加ということで、世田谷の事業に関わっていく。積極性はグラデーションがあっていいと思っていますが、地域課題や社会課題の関心層が多いことが世田谷の特徴であり、身近な地域で関わる意思を持つことがとてもいいことだと思います。なので、地域人材がそういった個人的な目標などを持って、関わってもらえる仕組みがあると良いと思います。

関わり方はですね。一番下にモニター、就労体験、社会課題地域課題解決型インターンシップ、就労マッチング及び事業連携と書かせていただいている。より就労とかビジネスに近いのが左側のゾーンで、もう少し緩やかに関わるというのが右側のモニターになっています。

モニターは、プラットフォームに賛同する個人が、モニターなどで登録していただくことで、良き市民や生活者として、サービスやプロダクトを事業者と共に育むようなことができると思います。また、エシカルタウンの構想と上手く連携していくことで裾野を広げられるのではないかと考えています。

就労マッチングと社会課題解決型インターンシップと就労体験は、中間支援組織によるディレクションと書きましたが、ここを専門的に扱うような地域の人事部的な機能というものがあった方が、より推進力が高まると思っています。

一社に一人といった個々のマッチングではなくて、プラットフォームと何かというように、面的な支援ができるようなディレクションをイメージしています。

就労マッチング事業連携というのは、就労がテーマで、ある程度積極的に働こうとしていたり、専門性やスキルがあって、副業やフリーランスとして動いているとか、自分自身が事業者であるという方を対象に、ビジネスのマッチングとなる就労をマッチングして行くというものです。職業紹介機能の充実などにもつながるかと思っていますし、区内産業のDXやIT、SDGsの対応が遅れ気味という課題に対しても、何かこうマッチングが進むのではないかなと思っています。また、SETACOLORのような、まちの人たちが創業を応援していくようなことも、ここでうまく連携できると面白いと思います。

真ん中のインターンシップは、就労に関する社会的な課題や、地域的課題をテーマにして、学習をしつつ、インターンシップをしてみたり、移行的な就労といったいわゆる就労とは違うかもしれないが、地域に参加する、社会に参加するという意図を持っています。私が事業で担当する世田谷のR60というシニアの事業も、就労マッチングと考えるとうまくいかないものだけでも、もしかしたらインターンシップという捉え方で地域の産業に関わるような意図を考えなおすと、もしかしたら人材側のモチベーションも上がるのでは、と思っています。あとは、学生が関わったり、子育て中の人に関わるとか、働く上での制約がある人や特別なニーズをお持ちの人、病気をもちながらも今日は体調が良いから何かしたいとか、そういった普通の就労では難しい人が地域に関わっていくようなイメージで捉えています。ここは一つで何かをするというよりもチームで働いたり、コミュニティベースで働くというようなことを考えています。

就労体験というのが、子供や障害者が就労体験を通して、地域の中で多様な働き方に触れたり、働くことへの不安を軽減したり、地域における新しい活力を獲得するというイメージをしています。その機会を地域の左側の事業者連携で作ることで、受け入れる側にとって

も多様性に出会う大切な機会となるのではと思っております。実際、川崎市がJリーグと連携して、障害児がフロンターレの全ホームゲームで掃除をしたり、チラシを配ったりという役割が、既に資金調達を含めて機能してると言うふうに聞いています。カワサキハロウィンといったまちのイベントに、障害児がかっこいいコスチュームを着て、地域の人たちから資金調達をしているということです。スポーツやエンタメで活躍をしていると聞いて、そういったことがやれると、吉田さんのアイデアにつながると思うのですが、ピッチのスタッフにそういう子が入っていくとか、子供たちが関わるということができると面白いなと思って書かせていただきました。駆け足で話しましたが、一社に何人ではなく、みんなでプラットフォームで持ち寄ったものをどうやったら解消していけそうかとか、ここでモデル事業を出してみたり、仮説を検討するようなことを想像してまとめさせていただきました。私からは以上です。

【長山会長】

ありがとうございます。はい、ありがとうございました。

基本方針4に関しまして、田中委員と見城委員からご説明をお願いします。

【田中委員】

ソーシャルデザインの田中です。

最後の「世田谷＝エシカルタウンの確立」という資料をご覧くださいながら説明させていただきます。

この資料に至った背景としては、前回見城さんがフェアトレードタウンを目指すまちづくりというプレゼンテーションに、私自身大変共感しておりまして、このエシカルタウンという、フェアトレードというとなかなか共感されるかどうか、言葉の理解の違いもあるので、エシカルタウンという言葉自体が世田谷を体現するような、そしてそこに住む人たちが世田谷に住んでるっていうこと自体がプライドになるようなシビックプライドという言葉もありますが、エシカルタウンというブランディングそのもののイメージをもっと強めて、実際にそれを実践しているまちづくりみたいなことが起こるとよいと思っております。

それを具体的にどうするのかっていうものを一つ、構想として、具体的なものを提案します。せたPay×エシカルポイントと赤丸になっているところです。これを行うと今バラバラでやっている、エシカルな活動をやってる人、すでにいっぱい居るんです。私の身近な近所のママ友レベルでも、エシカルな活動してる方、本当にいっぱいいます。今、転々としているものを繋げて広げることができるものという、せたPayとエシカルポイントのように生活におけるエシカル度を可視化して、それがお得に繋がるというような仕組みがあるだけでも、動き出すのではないかと思います。

これは、見城さんからのアイデアですが、これを具体化する上で、上にある施策案、1・2・3・4と書いてありますが、実はこれだけではないです。たくさんヒアリングしてきたら、いろいろ出てきました。一先ず1～4にしておきましたが、より具体的なエシカルポイントがくっつくと、こんなことできるというのが上の4つで、下の方はその施策とセットで

考えると、こんなことも背景で起こるといふ説明になります。

なので、上の施策1から順に説明します。まず、いきなり世田谷区全部で92万にやろうということではなく、ピンポイントに、商店街でエシカルポイントをテスト試行してみるだけでもいいのではないかと。例えば、エコバッグ持参で1ポイント付与される。これでごみを減らせる。また、飲食店の残飯コンポスト設置にエシカルポイントで助成する。そしてそこに近所の人達が生ごみ持ってきて、それでエシカルポイントが発生する。そんな連携が可能ではないかと思っています。

フードロス問題は日本の場合、深刻な社会課題にもなってますので、そういったことへの貢献にもなるというのが施策1です。

2番は、世田谷エディブルガーデン。エディブルとは食べられるという意味です。まち全体が、そこらにある花壇にブルーベリーが生えていて、小学生がそれをつまんで食べちゃうということが起こって全然いいと思っていて、そういうことを近所の人たち、お年寄りなど少し時間がある人や土弄り大好きというような人もいらっしゃるんで、そういった方々が畑のお世話や花壇のお世話をすると1ポイントもらえる。そうすると緑豊かな街路空間というのが世田谷中でできる、できていくという、そのような構想です。もしくは、建築家、デザイナーのようなプロフェッショナルも、世田谷区に多くいらっしゃいますので、エディブルガーデンを推進するようなコミュニティ、小さな集まりのようなものに参画することで、プロフェッショナルたちもエシカルポイントが報酬としてもらえる仕組みがあってもいいという構想です。

施策3は、「コンポスト活動とエシカルポイント」という部分です。生ごみは可燃ごみで、水っぽいものがわざわざ二酸化炭素を出しながら火で燃やして捨てなきゃいけないという社会的な仕組みになっているごみ問題ですが、可燃ごみの削減のためにコンポスト活動というものを実践して推進して行くっていうような中、例えば、コンポスト土を世田谷区のどこかに集めていく。農家か小学校か地域かという問題はありますが、コンポストを置いていいというような地区、例えば上野毛地域の人、そういった意識の高い人が身近でもいっぱいいるので、そういった人たちに協力いただきながら、ピンポイントで、テスト試行してもいいと思っています。そんなインタビューは得られています。

あとは、コンポスト土の堆肥ができますが、とても良い堆肥できる人もいます。それを農家さんが買えるかもしれないですし、安くエシカルポイントで買取できるかもしれない。そのような可能性も耳に入ってきております。

施策4は、世田谷区に点在する工場や工業エリアの人たちも、エシカルタウン構想に近くきっかけができるかもしれないというような案です。例2の部分ですが、都心部で工場持っているということがなかなかないのですが、その工場の中に水耕栽培をつくる。水耕栽培にすると農薬が削減できたり、都市型農業として、世田谷区がそういったポジショニングを確立する、もしくはその工場の中で水耕栽培やっていると近くの小学生たちが見学して、食育活動としての役割も果たすというような形で、今までのものづくりから都市型農業への発展に接続して行くという可能性も出てくるとイメージしておりました。

以上が施策案ですが、下の青い部分について、吉田さんと市川さんのお話からもあったよ

うに、エシカルタウン確立の道筋の中で、エシカル実践のための新たな事業創出というものが充分可能ですし、先ほどの水耕栽培のエリアにしても、最新の技術や先進のテクノロジーも大いに関係してくる可能性があると思っております。インキュベーションなどの仕組みがセットになると、より推進されると考えております。

真ん中の新たな教育機会というところは、エシカルタウンを目指す過程の中でも、環境リテラシー向上というものが世田谷区民全体に行き渡っていくようなイメージです。今でも既に相当のレベルがあると体感としては思っていますが、ずば抜けて世田谷区に住んでるだけで、すごくエシカルリテラシーが高いから自分もそうならざるを得ないし、それがむしろ自慢、プライドであるといったコミュニティ区民になっていくことを目指せるようなものになると、すごくトンガリができると思っております。それが子供達に向けての教育機会にもなりえるという話です。

最後、「若年層が社会を変える文化醸成」。これは私がソーシャルデザイン教育のバックグラウンドにいるので、体感としてあるのですが、例えば Z 世代以下の年代は、SDGs 理解が結構進んでいます。上の世代よりも進んでいます。なぜかその下の世代の人達の発想力やグローバル視点、携帯一つで世界とつながっているのも、意外と気候変動意識は高かったりする。また、キャッシュレスの生活が浸透してるので、ポイントの親和性はそういったデジタルネイティブ世代を取り込みやすいというところもあり、彼らが社会を変える原動力、中心人物になれる。つまり、プレイヤーとして世代を持ち上げていく。世の中と彼らがあの社会の中心になってプレイヤーとなっていくという文化醸成が、世田谷区の中で生み出されると、テーマの中にも入っている言葉、「わくわく感」につながっていくと考えています。私からは以上になります。

【長山会長】

見城委員、補足はありますでしょうか。

それでは、委員からの施策提案説明は以上です。ありがとうございました。

それでは、議題の 1 についての意見交換に移りたいと思います。まず次第の 1 についてですが、先ほど事務局から説明がありましたが、本日は資料の 3, 6, 7 をベースに深掘りするというところで意見ををお願いします。それでは、順番にいきましょう。

資料の 3 はこれまでのものを修正をしたもので、施策の列強が体系的に掲載されております。こちらはご意見いただかずともよろしいかもしれません。何かあればご意見いただければと思いますが、それより本日は、資料の 4 と 6 について、カラーの A4 一枚のものに関して、今後の作業に関わっていきますので、集中的に議論をしたいと思います。いかがでしょうか。例えば、4 に関しては、新ビジョンの全体像メインテーマとして、このわくわく感が世田谷の新たな価値と豊かさを生むということで、これがおそらく答申のところにおいても、また、今後策定するの経済発展ビジョンにおいても、このテーマが前面に出てくるため、このままよしとするのかということところが議論として一つあるかと思っております。また、資料の 6 に関して、課題は概ね合意ができていると思っておりますが、視点の 1 から 5 に関してご意見をいただきたいと思っております。

では挙手でお願いできればと思います。では田中委員、お願いします。

【田中委員】

このメインテーマですが、わくわく感が生む、世田谷の新たな価値と豊かさということで、我々は会議にこれまでも出てるので、この言葉が示す裏側の意味や意義、イメージは皆さんもお持ちだと思うのですが、私は25年、クリエイティブ業界でコピーライターと一緒に仕事しながら、企業のミッションビジョンバリューを作ることをやっているのので、その言葉が世田谷区に出た時に、本当にこの言葉で汲み取ってくれるかどうかということが正直なところ非常に疑問があると、本来であれば、プロのコピーライターを連れてきて、たたき台を作ってもらい、皆さんで選ぶというようなプロセスがあってもいいと思っています。とはいえ、意図は分かっているので、私たちもこの言葉づくりというのは、答申や様々な資料が最終的に表に出る前に、議論を尽くした方がよろしいと思っています。伝わり方の問題だけです。言葉一つの皆さんが持つ、捉えるイメージや意味は難しいので、扱っただけ心配です。まず私からの印象です。

【長山会長】

すぐに代替案を出すのは難しいかもしれませんがいかがでしょうか。

前橋市は「芽吹く」というキャッチコピーで、これが浸透しており、商工会議所の人たちとか、もともとはスタートアップの方々が言い出した言葉が、既存の産業の方々に浸透してきて、更に住民もというところで、何かチャレンジしていこうということにおいての言葉として出てきます。

浜松市が「やらまいか」だったり、それぞれ市民会議などの合意形成やミーティングを通じて、そういった言葉に収斂してっているのので、今ここで出すのは難しいかもしれませんが、田中委員ももしあればいかがでしょうか。私のイメージとまた違うのかもしれませんが、ご教授いただければ。

【田中委員】

ありがとうございます。進め方とか決め方っていうのもプロセスはあると思います。私もある程度、皆さんと共有はできていますし、そもそもこのテーマはいつ世の中に出る認識でいけばいいですか。

【納屋産業連携交流推進課長】

後で説明しようと思ってはいましたが、資料8のスケジュールを見ながら、ご説明させていただきます。10月5日に次回会議を開催します。その際には先ほど資料7で20ページほどの答申案を今日の議論も踏まえて、我々の方でご提示をさせていただいて、最終的なご議論を10月5日にさせていただくことを想定してございます。

その後の会議を踏まえて修正調整があり、10月中旬には答申という形で区に返して頂くことを想定しております。答申をこの会議体から行政側に受け取ったところから、産業ビジ

ョンを行政内部で作りはじめ、その上で、各種プロセスを経て、12月頃にはそのビジョン案を会議でご提示をさせていただき、そういうスケジュールを考えております。

【田中委員】

ありがとうございます。

勉強会などを通じて、皆さんがこう思い描いてるイメージを言葉に収斂していくという、そのプロセスは本当に必要なのかと思っています。議論を重ねていく中で、皆さんが一言二言で、どういう言葉に当てはめられるのか。これが会議体で考えられれば、ベストだと思いますし、民意が反映されてるとということにもなりますので、外からプロのコピーライターが作るというよりもこの会議でできるということも、ある意味いい位置づけになると思っています。せっかく勉強会をこまめにやってるので、今回4つの提案をして行く中で、個別に委員の皆さんともつながりが強まってきているので、言葉を重ねていきながら収斂していくというプロセスがいいと考えています。

【長山会長】

それでは、まずこの資料4の「わくわく感が生む世田谷の新たな価値と豊かさ」これを一言で、多くの区民や関係各位に伝わるように、少し考えましょう。そもそもメインテーマもこれでいいのかということもありますが、いかがでしょうか。これまでの委員のご意見、いろいろなところを貫いてる考え方もそうですし、私は個人的にサステナビリティとウェルビーイングというものが、キーワードだと思っています。また、それは、このビジョンにおいては、10年くらいの賞味期限かもしれませんが、おそらくその間、引き続き重要なワードだと思います。先ほど若い人たちにおけるSDGsの意識みたいな話もありましたが、本当に地球環境、惑星の危機という認識が高まっていて、そういう中において世田谷区としてのサステナビリティはどう考えているのかということもあります。

また、そういった大きな視点から考えることもあれば、ウェルビーイングのように個人としての豊かさ、これは幸福というようなどころだけではなく、福祉的観点も入っていますが、そういった主観的なハピネスだけではなくて、先ほどの委員のプレゼンにもありましたが、だんだんとそれが外に向かってコミュニティの幸せに繋がっていくというところで、それがどんどん連鎖して行くみたいなものもありだとおもいます。それはいわゆるウェルビーイングという考え方になってきます。

なので、そのあたりは、最上位のテーマなのだと思いますが、こういった横文字だと分かりにくいということがあります。そういったところは、先ほどアントレプレナーシップの解釈も丁寧に事務局の方からしてもらったように、我々としての解釈をつけてこの素案に提示すればそれで問題ないと思います。もちろん最終的に区としてビジョンという形で議会に提示する時に、横文字ばかりだという話があるかもしれませんが、ここは答申なのであくまでも委員の発言というものを集約して区の方に提示したということですから、委員の方からの合意が出ればそれで、問題ないだろうと思っています。ですので、そういった面で無理に横文字を避けなくても、その言葉じゃないと表現できないということがもちろんある

ので、それはそれでよろしいのかなと個人的には思っております。他いかがでしょうか？取り組みの視点とかもぜひお願いできればと思います。

では、大石委員、お願いします。

【大石委員】

資料7に移ってしまうのですが、今回、答申の中で、もうすでに挙がっているかもしれないですが、このサステナビリティとかウェルビーイングというこれから大きくなる一つのマーケットを想定した際に、この基本方針を作ることによって、世田谷区の経済がうまくいった時に、それは数値として表現されるのかなと思うところがあります。長山先生の専門かもしれませんが、国でいうと経済の方針を作ったから、結果的にGDPが上がったとか、これがうまくいったのか、うまくいかなかったのかという相関関係を何かしら数値で検証できるものは、インパクトとかそういうワードも出ていますが、この中に入ってくるんですか？

【長山会長】

今、区の方でソーシャルインパクトに関する指標づくりを裏で進めてはいます。ただ、これは、我々の答申としては、視点2でインパクト評価の導入という提案で収めるという形になっていて、あとは区のほうで考えてくださいということになっています。そのあたりは私も実は少し思うところがあり、10月の会議でどういうインパクトの基準を考えているのかを少し頭出しだけでも出してもらえると、イメージが湧くし、今の長石委員の回答にもなるのではないかと思います。もちろん準備が進んでいけばということになりますが、今、準備状況も含めていかがでしょうか？

【納屋産業連携交流推進課長】

今、会長からご説明していただいたとおりのプロセスを考えていて、裏では考え始めています。ただ、今この場で10月にお出しできますと明確に申し上げられないのですが、しっかり受け止めました。

【長山会長】

どんな基準があるか等の頭出しはできそうでしょうか？

【納屋産業連携交流推進課長】

今、手元になく覚えていないので難しい状況です。10月に数字までできるかというのは、またビジョンづくりの方と絡んでくるので申し上げますが、受け止めさせていただいて努力いたします。

【大石委員】

責めてるわけではないので、全然大丈夫ですが、例えば大企業だったらご存知のとおり、CDPと言われる団体があって、ESG投資家が評価付けするわけです。これは非財務諸表

に対しての持続性、企業の持続性を評価するわけです。同じように、基礎自治体が持続可能な都市なのかどうか、例えば国際的にそれを評価されているような基準があるのかなのか、もしくはなければ逆に作ってもいいと思うところもあり、その一つのモデルが世田谷区から、例えば持続可能な指標ってこういうものだよと、実は世界のニューヨークやロンドンよりも世田谷区がすごく指標が高いんだみたいなのが、将来にわたって明確化されたら、これはすごく条例をつくってよかったねっていうことになるのかなと思いました。自治体で、基本方針作った時に評価されるのかということにちょっと興味があってお聞きしたんですが、そういう考え方がかもしあれば、教えてもらえればなと思います。むしろあったほうが、本当にうまくいったのか後で検証する時にもいいんじゃないかなと思いました。

【長山会長】

いわゆるその KPI みたいなものでこれまでも産業振興計画に対する達成率は出していて、創業に関して言うならば、新規事業者が何社かとか、それが区に何社定着したかとかで、達成率とかっていうのはあったと思うのですが、難しくて、今回我々の方で、基本方針の 2、3、4 のような、いわゆる非経済的な社会的なインパクトみたいなところを意識するような施策が出てきましたのでそのあたりを少し組み合わせて、まさに大石委員の言われる独自の指標を作らないといけないというところはあるんだろうと思います。で、いわゆるその社会的なインパクトに関しては、LWC 指標、ウェルビーイングの指標というのがあって、これは各自治体でもかなり取り入れられています。ただ、これもそのまま採用するとデジタル庁の思惑通りになってしまうので、自分たちの世田谷区にとってみて、区民意識調査との連動性も考えながら必要だと思われるような一部を取り入れていくことは、部長同士の勉強会でもやられたりされてるというところで、ここは試行錯誤で区独自の指標を考えているところであり、これからご意見とかをいただければ。ほかいかがでしょう？ では、竹内委員お願いします。

【竹内委員】

資料 6 についてという話でしたので、資料 6 についての感想的な意見を言わせていただきます。私の理解が及んでいないところがあって、この視点を読ませていただくと主体が誰なのかっていうのが気になりました。主な課題の中で、例えば、行政だけでやる意識からの脱却、他の団体等との連携促進ということが書かれていますが、その原因のところ、施策の使い勝手が悪いという言い方をしてしまうと施策が元々あってそれをどう使うかっていう視点で書かれているので、行政が主体という話になってきますし、その先の展望の視点の 4 に民間活力活用という言葉が出てきますが、これはこういう言葉でいいのか。一緒にやっていくということという、こういう言葉ではないのではないか。むしろその下に書かれている地域の資源としての専門的な知識を持った人たちが、活躍できていないとかそちら側の視点、立場からの言葉に替えていただいたほうが受けとめやすいんじゃないかなっていう感じました。全体に書かれてる内容はそうだなと思いますが、青字のところ、書いてある言葉が行政よりであるという印象、感想を持ちました。

【長山会長】

私も全く同じことを考えていて、実はこの後も言おうと思ったんです。視点4の民間活力活用と役割分担っていうのは、齟齬があると思うんですよね。その多様な主体を巻き込めていないという課題に対しての視点ということになった場合に、それは今、公民共創ではないですか？ ここにも書いてあるとおり、共創というのは公民公約と民間が共に創る。これは今、自治体の政策づくりのキーワードです。役割分担というのは、2000年代の話です。要するに小さな政府って言われたときの話です。つまり、行政が財政コストを削減するために、民間の方になるべく活用しましょうと言っていた時代の話で、その際にセクターという言葉が出てきて、第一のセクター、第二のセクター、そして、第三のセクターという民間非営利セクターに下請け的に任せてしまうみたいなことがありました。その役割分担になっているのですが、それが今問題になってるっていうことがあります。もちろんそれは、国の立場からするとそういったことでまだ役割分担で考えることもありますが、少なくとも今のわれわれの世田谷区の条例作りで、ずっと意見を積み重ねた中においては、そういった言葉よりは、公民共創とか人をいかに巻き込んでいくか多様な人を巻き込んでいくかというようなことの方が、表現としてはよろしいような気がします。ということで、竹内委員は、同じようなことでいいでしょうか。

ありがとうございます。ほかいかがでしょうか。ほかにもこういった視点があるということも含めて、2のインパクトの話と4の話がありました。ほかいかがでしょうか？

【竹内委員】

先ほどの先生の提案のことも含めて、私の感覚とどうなのかなと思ってお伺いしたいのですが、まちづくりセンターを地区の共創のプラットフォームにと提案されていましたが、こういう事業活動のフィールドとして、2, 3万単位の地区であるまちづくりセンターというのが、果たしてプラットフォームの場としてふさわしいのかどうかということについて意見させていただきます。行政で福祉の分野でいうと歩いて通える範囲の中でのサービスだったり、フェイス to フェイス的な対応、関わりを持ち続けるとかそういう意味合いの中で、地区の役割というのは非常に大きくて、地区の力の強化をしようということを行政の中で議論されていますが、事業活動というのは世田谷を拠点にして世界でやっていたり、いろんなところと取引やってるというのもあるし、商店街の路面店のように、地域の方を相手にやる形態もありますが、そうではない形態も非常に多い中で、地区を単位としたプラットフォームというのが成り立つのかということについて伺って、そういう視点があるのか、成り立つのかなってことを感じたので、教えていただければと思います。

【長山会長】

今、議論が資料の参考の方の委員提案になりましたので、この際ですのもう参考2のところも含めて議論を広げてもらえればと思います。

竹内委員からお話があったところで言うと、二枚目のところになりますが、まちづくりセ

ンター、これを見てのとおり、例えば用賀とかそういった単位なわけです。ですので、実際にもう用賀だけでかなり面白い集まりができています。

プラットフォームというのは階層構造になっていて、おそらく竹内委員がいう世田谷全域を集めて世田谷全域のリソースを集めるようなそういったつながるような大きなそのプラットフォームというのが、考えられている地区ももちろんあると思うのですが、プラットフォームは階層構造になっていて、上にたくさん乗っかっていくっていうようなイメージです。

ですので、人口が1万人ぐらいのようなコミュニティ経済においても必要で、問題はなんのプラットフォームなのかということですが、そこがポイントでそれぞれのエリアごとに、例えば、用賀だったら用賀における課題・テーマ、そのテーマにおけるプラットフォームになります。それが食なのかかもしれないし、スポーツなのかかもしれないし、子育てとかかもしれません。なので、そのエリアで、重点的に決めてもらうということが一つあるのかなと思います。おそらくですが、今回あったようなエシカル消費や働き方といった事業者というよりは、いわゆるその住民がいかにか主体的にこの産業界に関わるかという視点で言うと、身近な住民の身近なくらしの現場の方がそういった課題を吸いやすく、実際に起きやすい。

いくつか自治体の事例があって、例えば、PTAや町内会といった住民組織から何らかの働くとかビジネスというようなところにつながるような創造が起こるような仕掛けをしてくれるような自治体があります。共同労働組合みたいな話があり、その共同労働の一つのあり方で、シモキタ園藝部が、かなりの住民を巻き込みながらやっていて、先ほどのエシカルでいうとコンポストのようなこともやっていますし、また事業者と関係ないかというところ、SETACOLORで支援したフルーツ販売の東果堂さんが、フルーツの廃棄物の処理をそこでして、コストが削減できたとか、そういったコミュニティ経済のところアイデアがどんどん出てきて、実装もできるというところかなと思っています。

人口1万2万っていうのは結構な規模です。ですので、本当はまちづくりセンターの中でもさらにもっと細かい小学校の学区ぐらいでも起こりうるかなと思っています。そういったものに対して、任意の団体でも、作った際に助成したり伴走支援をするなどの取組を広島などではやっていて、共同労働を進めるプラットフォームみたいなことをやっています。50万円ぐらいの三年間の助成金とそれに対するコミュニティマネージャーやアントレプレナーを育成するような伴走支援の方を派遣するという派遣制度をとっていて、これは面白くてどこでも取り組めるとなっています。

そのほかエシカルタウンとかサステナブルワークスタイルとかいくつか委員提案もありましたので、そのあたりについても少し検討いただければと思います。いかがでしょうか？本当はファンドとかといったときに大企業とかスタートアップみたいなところが、お金出すということもあつたらいいと思うんですが、大石委員いかがですか？こういった事業としてなにか関わっていただけないかなと思うんですけど。

【大石委員】

循環を作るという意味でいうと、例えば、たくさん利益が出たタイミングで何かしら循環を生み出すために地域還元する。それが結果的には還元した側にも何かしらのメリットがあ

るとか。単なる博愛精神で行われるのか、もしくは還元することによって、何かしらの循環が起こるのかというところをしっかりと基本条例の中で設計されたいと思います。

前にもお話したとおり起業しようという風潮はこの中でも充分と担保されていると思うんですけど、では失敗した時にどうするのっていう受け皿だったり、成功した時にどうするのかというところの受け皿など起業した後のプロセスはある程度謳っておいたほうがいいかなと思います。

それが上手くいった場合にどう循環するのかっていうところに関して言うと、私たちとしてはすごく興味あります。今は全然うまく行ってませんから還元するものがないので、あの還元はできないのですが、原資が生み出されれば、すごく僕は興味があるし、やっぱりどうせやるのであれば世田谷に還元したいという思いを持って事業に取り組んでいらっしゃる企業は多いんじゃないかなと思います。特に世田谷発の企業の場合はこのように思いますけどね。すごく面白いなと思いました。実際、僕たちもずっと思ってたんです、吉田さんが提案されたみたいに、二極化しているという話も聞きますが、もともと生活レベルの高い方が多くて、そこから資金調達する手段とかって、ベンチャー側に立ってもいいと思うし、逆に還元するのもあっていいのかなと。むしろ金融機関のお仕事なのかもしれません。

【長山会長】

ありがとうございました。金融機関という面で、中山耕輝委員、お願いします。

【中山（耕）委員】

KPI というお話がありましたが、委員から提案いただいたエシカルタウンの考えは非常にいいなと思っています。エシカルポイントは流通量で計ることができるし、投入と産出で言えば、例えば、まず生ごみがどれぐらい減って、生ごみによってたい肥が生産されて、作物を育て付加価値をつけて販売するということは、かなり KPI として計測できると思います。

また、クラウドファンディングということであれば、購入型であれば割と入口は難易度が低いと思います。それこそ世田谷区がバックについてくれるのであれば、いろんなファンドもできるかと思うのですが、なかなか厳しいところがあるかと思っています。信用金庫は協同組合組織ですし地域金融機関ですので、そういった意味では、地域の産業創出のためであれば出資者の方に説明ができるというところがある。複雑で結局何に使われるか分からず、ただ収益性のみ追求する投資よりも、地域のためにということであれば、納得感もあり、地域経済を活性化させるそういう組織であれば、一定量については考えられなくもないかなと思います。ハードルが高いようであれば、エシカルタウンの仕組みを活用し購入型クラウドファンディングで始めてもいいのかなと提案を見ながら感じました。以上です。

【長山会長】

ありがとうございます。信用金庫としてもこのエシカルタウンの仕組みの中でファンドなど関わりができればという話で、前向きなお話ありがとうございました。商店街とのかかわりの中で、エシカルポイントとかせた Pay みたいなところも書かれているのでもし栗山委

員、なにかあれば、お願いします。

【栗山委員】

商店街の栗山です。先ほどのエシカルタウンのプレゼンの中でせた Pay が、資料の中に入っていましたが、せた Pay は商店街連合会が世田谷区からの支援をいただきながら運営をしているものです。資料をみると、商店街があって、農業さんがあって、工業さんが出てきて、商工農の三業種が出てきて、また色々な業種の方々がこれに関わってくるのかなあという印象を受けました。

実は先ほどここで商店街連合会の理事会をやっていたのですが、その令和5年度せたがや Pay 機能拡充について、今後の展開としてこういった話は出ていないんです。実は地元商店街で運営して発行しているダイヤスタンプポイントというものがあるんですが、そちらの方だと IC カードを発行していて、そこでは、例えば月一回、地域の民間団体がまちを清掃してくれていて、そのお掃除を手伝ってくれた人に対して、ポイントを差し上げるということをやっていたり、そのほかにもいろんなことやっているんですが、そういった地域に住んでいる方との連携につながっていくんだろうなと感じています。それを世田谷区全域に広めていくためにせた Pay を使うというのは面白いなと思いました。ただ、そのポイントを付与することに対しては、原資が必要になってくるので、ここは後藤部長に頑張ってもらえば商店街連合会としても検討の課題になるのではないかと考えております。よろしく申し上げます。

【長山会長】

ありがとうございます。こういう具体的な話の会議をしたら、まさにわくわくする話になって面白いのですが、とは言えこの会議としましては答申案出す必要がありまして、次回の10月には資料7にある答申案を9割方完成させて出すということを考えております。そういう意味で、次回出てきた答申案が全く考えているものと違うということになると、それはよろしくないで、特に目次のところなど、このままの流れで進めてよろしいかということにも合意を得られればと思うのですが、いかがでしょうか。

4番のその他というのはその他でいいんでしょうか？この表題は少し考えた方が良くかなと思います。ちなみに、4その他の(1)体系図と(2)目指す姿と取組みの方向性等というのは資料でいうとどこを盛り込む予定でしょうか？

【納屋産業連携交流推進課長】

体系図というのは、今ご提示している資料4や資料6を合意が得られれば、まとめて盛り込んでいってもいいと思ってるのですが、とりあえず外出しで今はおいています。で、(2)目指す姿と取組みの方向性等というのは、先ほどご提示しています資料3ですが、これも全くそのまま取り込んでいるかということ、文字を少なくして取り込んでいます。せっかくご議論いただいた話なので、付録的につけるというのを想定して今は書いてございます。

【長山会長】

ありがとうございました。それでは委員提案は、3の(3)の基本方針のところコラム的に入れてもらうような感じがいいかなと思います。その他というのは少し表現を変えて、それこそ委員名簿、審議過程とかグラフィックレコードは、参考資料ということになるかもしれませんが、(1)と(2)は大事なところだと思うので、本文の方に入れるということでしょうかね。さっと見て、お気づきのところがあれば、いかがでしょうか？

また、この場で意見がパッと出ないようであれば、メール等で事務局の方にご意見をお寄せいただければと思います。あと5分程度ありますので、今日の議論すべてにおいて、お気づきのところがありましたらいかがでしょうか？ 中山綾子委員お願いします。

【中山（綾）委員】

感想になってしまうのですが、皆さんからの施策提案を拝見し、この資料4、6も拝見して、誰も否定しないものにまとまってると思うのですが、みんな総論そうだよねってなったときに、では何をどうやってわくわく感を与えていくかとか、どうやって巻き込んでいくかみたいなことになったときに、この提案の中にもあったせたPayとエシカルポイントのような、これだけ暮らしの中にスポットが当たる、散りばめられて知るきっかけみたいなのが入るのはとてもいいなと思いました。

その上で先ほどのキャッチコピーなのですが、このわくわく感が生む世田谷の新たな価値と豊かさというのが、ポスターみたいにドンって出てしまうと凄く、美味しいパンとか楽しいイベントって言っているように、じゃあそれ、本当にわくわくなのってしまうかもしれないのですが、今後、こういう施策でこういう世田谷を作っていきますという具体的な施策の検討になった時に、それがわくわく感を生むものであるのかとか、エシカル、ウェルビーイングにどう寄与するようなものであるかという一番の判断基準になるビジョン、ミッションみたいなものになるのだとしたら、すごく言い得ているというか、きちんと判断基準になっているのではないかなと思いました。我々が検討して出したキャッチコピーですと、ポンってスローガニックに出ると、どう受け取って頂けるか分からないなと思うところはあるのですが、これが今後の施策の判断基準になりますという説明がつけば、ああ、なるほどなということになるのかなと思いました。感想でした。

【長山会長】

また詳しく教えてください。では、千葉委員、お願いします。

【千葉委員】

千葉です。今のメインテーマの話で、世工振の立場ではなく、自分の仕事でやってる立場が入ってしまうのですが、このわくわく感が生むという言葉が、誰が見てそれがわくわくなのかということが、この言葉が引っかかっていると話を聞いて思いました。わくわくという言葉をなにか他に置き換えれば、後ろの世田谷の新たな価値と豊かさというところは、かっこよく見えるので、そのわくわく感という言葉の使い方を変えたほうが、受け取り方はすごく

いいと個人的に思いました。

あと、大石委員の話を聞いて思ったのが、利益が出たものを還元するという話です。、持たざる人間が持つ立場になったときに還元したくなる、気持ちよく出せるようなものが区にあってほしい。そうすると当然、その区にずっと居続けるということになってくる。会社が大きくなったので、キャパがもう合わず、無理ですという話になるかもしれないけど、それでも本店登記を世田谷に置いておきましょうという話になるかもしれない。今このタイミングで、どうのこうのって話ではないですが、そういう感じは今話をされていて、すごく感じたので、それを盛り込むかどうかというのは別にして、ちょっと気になりました。以上です。

【長山会長】

ありがとうございました。また新しいビジョンのところで、メインテーマのところは議論をしていければなと思います。たしかに基本計画だとか、他の自治体でも書いてることだと世田谷のという言葉が消してしまうと、新たな価値と豊かさというどこでも同じようなことになってしまうので、この発展会議の議論を集約した一言というのは本当に難しいです。ですので、そこはいったん置いておいて本文のところをしっかりと書き込んで、コンセプトを一言で表現するというのは、別の場で議論できたらよろしいかなと思います。

ということで、本文のところで何か違和感があれば、この場でご発言をということですが、大丈夫そうでしょうか。よろしければ、この方向で答申をまとめていきたいと思いますがよろしいでしょうか。城田委員と古谷委員が発見されていなかったですが、大丈夫でしょうか？

【城田委員】

答申案ということで、文字にまとめると資料4とか6とかになるとと思いますが、今一つ心に響いてこない。少し工夫され、具体例を入れてもらえるといいと思います。ここに書いてあることは分かるのですが、もう少し直感的に分かるように書かれた方が良いと思います。

【長山会長】

それでは、時間になりました。皆様活発なご意見やご指摘ありがとうございました。次回以降に向けて事務局で整理をしていただければを思います。最後にグラフィックレコーディングについて、本日時点のものということで、渡辺様からよろしく願います。

【渡辺氏】

本日もグラレコしがいいのある内容で、いつもグラレコする前に納屋さんとどこをグラレコしますか？という話をするのですが、今日は、皆さんこれまでの議論が頭に入っているでしょうし、4名のもしっかりまとまっていたので、もうやらなくても大丈夫じゃない？ぐらいの話を雑談でしていたんですけども、やっぱりグラレコ的に見るとプレゼンの内容で出てくるキーワードが面をつなぐとか、接点を増やすとか、立場を超えて越境するための仕組みづくりだったりとか、施策みたいなキーワードがいっぱいあるんですが、それぞれのテー

マだったり、視点が違うことによって、浮かび上がってくる構造とかがちょっとずつ違うので、そういうところを意識して、このあと仕上げていきたいと思えます。よろしくお願ひします。

【長山会長】

いつもありがとうございます。最後、事務局より連絡事項をお願いいたします。

【納屋産業連携交流推進課長】

事務局より事務連絡を申し上げます。まず、本日の会議録については、事務局にて作成の上、後日、皆様に確認をお願いしたいと思います。その上で、準備が整い次第、HPへも掲載をさせていただき予定ですのでご了承ください。

次回、第6回を10月5日（木）に予定しておりますので、ご出席のほどをよろしくお願ひいたします。

さらに資料8で初めて提示させていただき内容ですが、12月に第7回の会議を開催させていただきたいと考えておりますので、こちらについては、明日以降、日程調整の依頼をさせていただきますので、よろしくお願ひいたします。

3. 閉会

【長山会長】

それでは、第5回地域経済の持続可能な発展を目指す会議はこれにて終了いたします。本日は長時間ありがとうございました。